

他県では夏の風物詩のひとつでもある暴走族だが、新潟県内ではあまり見ないような気がする。暑かったこの夏、その数少ない機会に彼らを見ていて不思議に思ったのは、各種の反社会的(と云う表現が適切かどうかかわからないが)集団に属する人々は、なぜ普通の人が決して着ないような服を全員で共通して着ているのか、と云うことだった。

これは暴走族に限らず暴力団の場合も同様である。そして一般の側も、そ

時々 草々

る。あれは少数者の団結に見えなくもないが、実際はそうではないだろう。おそらくは一種の「住み分け」だと思われる。つまり反社会的な人々は

越智 敏夫 (新潟国際情報大学教授)

うした人と接して無用なトラブルに巻き込まれるのを避けることができない。つまり双方が得をするシステムである。おそらくもともと治安

る。バスで自分の隣に座っている普通の外観の人が実は殺人鬼である可能性を想像すると、その恐怖は理解しやすいだろう。反社会的な人を外観

で識別できることは社会の治安に役立っているのである。しかしこの仕組みでもっとも利益を得ているのが国家権力であることも

て、権力に反抗的な態度をとることまでを倫理的に悪いことだと一般人に思い込ませることができ

反社会的集団と国家

の悪い社会とは反社会的な人とそうでない人の区別がつかない社会である

おち・としお 1961年愛媛県生まれ。立教大学法学部卒。慶応大学大学院政治学博士課程修了。96年、新潟国際情報大学講師。2006年に教授。専門は現代政治学理論。

間違いない。権力維持のために反社会的な人々を常に可視化し、特定の集団に封じ込めておくことが重要なのである。それはまた治安維持に有効なだけでない。そうした集団を「悪い人々」と規定することによっ

しはしめる状況である。暴走族や暴力団がなかなか根絶されず、その存在が権力によっていわば黙認されている理由はこのあたりにあるような気がする。そう考えるのは残暑ゆえの妄想だろうか。

